

## 巻 頭 言

九州大学数理学研究院

金子 昌信

編集委員長からの依頼文によると、この巻頭言は、「数学会・数学界に対して様々な寄与のあった方々に」お願いしている、とありました。私が何かそのような「寄与」をしたか、と言われると、少々考えてしまいますが、ともかく私は、2016年度から三年間、日本学術振興会(「学振」)の学術システム研究センター研究員(「センター研究員」というお役を仰せつかり、昨年度末に何とか任期を全ういたしました。センター研究員とは、文科省と学振が作成したパンフレットには、「研究者の立場から科研費をはじめとする日本学術振興会の事業の改善・充実に関わる」業務を行う、とあり、科研費の場合ですと審査や採択に直接関わるのではなく、審査委員候補者案の作成や、書面審査や合議審査における利益誘導の有無、審査の適切性等の検証・分析を行うなど、審査が公正・厳正であることを保証するための裏方役、と言えましょうか。合議審査の審査会には実際に陪席して状況確認や検証などを行いました。また科研費以外にも、特別研究員制度に関する同様の仕事や、学振が行っている顕彰事業(色々な賞など)における予備選考、学術研究動向に関する調査などが業務に含まれます。詳しくは学振のホームページの中の「学術システム研究センター」というところに色々な資料と共に公開されています。センター研究員は専門によって幾つかの班に分かれていて、私が所属したのは「数物系科学専門調査班」という、科研費の新しい審査区分で言うと「大区分 B」に関する班です。全部で13名、うち数学の人が3名でした。毎月の班会議では冒頭に一人が自己紹介的な研究発表をする時間が設けられており、物理、天文、地惑、プラズマ科学などの一流の研究者の話聞くのは大変面白く、へーと思うことが沢山ありました。私も在任中二回、自分の研究の紹介を行いました、相当に突っ込んだ質問をされる(他分野の)方もおられ、さすが超一流の人は違うと思ったものでした。また学術動向調査ということで、こういうお役を頂かないと経験出来ないような機会も得ました。任期の終わり頃に訪れた北大の低温研究所では零下50度の低温室で何万年前かの南極の氷のサンプルを見せてもらったり、研究用に使った残りのその氷(当時の空気が閉じ込められている!)を食べさせてもらったり、大変印象的でした。

多くの人がそうではないかと思うのですが、私もこの仕事をやるまでは、科研費の仕組みがどうなっているのか、誰がそれを支えているのか、などにはほとんど無頓着でした。申請しては当たった、当たらないと(この言葉遣いも一寸変ですね)一喜一憂し、時に審査を頼まれたら渋々ながらも引き受けて書類の束と(盆暮れに)格闘する、という年月を還暦近い歳まで経てきたものであります。しかし、内実を知ってみると、科研費や学振研究員の制

度は、審査員だけでなく、学振の職員の方々や学術システム研究センターに関わる多くの方々の並々ならない努力の上に成立していることがよく分かりました。

科研費は2018年に創設100年を迎え、それを機に審査制度が大きく改革されました。はじめにも書きましたように、編集長からは、その科研費改革に関わってきた私に巻頭言を、という依頼だったのですが、私がセンター研究員に着任した頃には既に改革案は実質ほとんど出来上がっていた状況でした。ですので、「改革から二年たち、改革前には見えなかった問題点など、見えてきているのではないかと」思うのでその辺も含めて執筆を、との依頼には、満足にお答え出来る任にはないなと言うのが本音のところでした。それに、改革の功罪を検証するにはもう少し時間が必要だろうと思われまます。一般に科研費は、分科細目の見直しを5年ごとに、より大きな改革を10年ごとに行ってきたと言われ、しかし今回ほど制度を大きく変えたのは初めてではないかということです。聞くとところによると改革の動機は、科研費が狭い範囲で互いに評価をして既得権益になってしまっている、その結果研究の蝸壺化も生んでいる、との外部評価の批判に応えるため、とされ、予算規模の大きい種目では従来より広い審査区分で審査がなされるようになりました。これについては、その趣旨をよく理解して申請しないと、思ったような評価が得られないかも知れません。実際面では、審査員が従来の1.7倍ほどに増え、学術コミュニティ全体の負担増と、また審査会の運用一つをとっても大変になりました。これまでは学振の職員だけがやっていた審査会の事務的な部分の説明役なども、人手不足からセンター研究員が一部やらざるを得なくなったのも我々の任期中からです。毎月一度の定例会議の他に、審査員選考や審査結果の検証等、学振に直接出向かざるを得ず、この3年間は相当な回数福岡と東京を往復いたしました。任期が終わるとしばらくは「四ツ谷ロス」と言っ、定例の会議に行かないことに何か喪失感を味わったほど、学振行きが習慣化しておりました。そういう3年間の経験の中で何と言っても頭が下がったのは、学振職員の働きぶりを別にしますと、基盤Aや基盤Sなどの合議審査にあられる、特に審査部会長を務められる先生方の自己犠牲的な、労力を惜しまない姿です。立派な業績を上げておられる方ほどああいう場でも立派だと感じました。ある先生が、大変だけれども、これが日本の学術を支えていると思うとおそろかには出来ないしやり甲斐がある、と言われていました。科研費は、ピアレビューと言いますが、こういう方々がおられないと健全な形では成り立っていかない制度であると思います。自分が研究費をもらうために申請をする以上、審査にも依頼されれば誠実に関わる、ということが大切なことと思います。そういう姿勢を、お天道様はご存じ、と言いますか、見る人は見ている、ということを感じた三年間でもありました。期待されたことは書けずにただの雑文で終わってしまいましたが、センター研究員という仕事があるのだということを知っていただけただけでもよしとさせて下さい。